弟子の条件

――ルカ14:25-35の釈義的研究――

嶺　重　　淑

序

ルカ14章25-35節は、「私の弟子になることはできない」という表現によって締めくくられる三つの信従の言葉（26, 27, 33節）を含んでおり、ルカ9章57-62節と同様、イエスへの信従、すなわちイエスの弟子としてのあり方を指し示すテキストとしてルカ福音書において重要な位置を占めている。このテキストは、多様な要素から複合的に構成されているが、厳格な信従の言葉（26, 27, 33節）とそれによって枠付けられている二つの譬え（28-30, 31-32節）との関係、さらにはこれらの箇所と、テキスト全体を枠付けるイエスのエルサレムへの旅の状況を示す冒頭の序文（25節）、末尾に付せられた塩の比喩（34-35節a）及び結語（35節b）が内容的にどのように関係しているかという点は、必ずしも明らかにされてこなかった。

そこで本稿では、テキスト全体の厳密な釈義を通して、ルカ福音書の文脈におけるこのテキストの統一的主題及び各節相互の関係を見極めると共に、そこから読み取れる現代へのメッセージについて考察していきたい。

1．私訳

14:25 さて、大勢の群衆が彼（イエス）と共に進んでいたが、彼は振り向いて彼らに言った。26「もし誰かが私のもとに来て、自分の父、母、妻、子ども

たち、兄弟たち、姉妹たち、そしてさらに自分の命さえも憎まないなら、私の弟子になることはできない。27 自分の十字架を担って、私のあとから来ない者は誰でも、私の弟子になることはできない。

28 というのも、あなたたちのうちの誰が、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるためのものを自分が持っているかどうか費用を計算しないだろうか。29 そうでないと、彼は土台を築いたが完成できず、見ていた人々は皆、彼をあざけり始め、30『この人は建て始めたが、完成させることはできなかった』と言うだろう。31 あるいは、どんな王が、ほかの王との戦いに赴こうとするとき、まず座って、彼に向かって進軍して来る二万〔の兵〕に一万〔の兵〕で立ち向かうことができるかどうか、考えないだろうか。32 そして、もし本当にできないなら、彼（敵）がまだ遠方にいる間に使者を送り、和を請うだろう。33 だから、このように、あなたたちのうちの誰でも、自分の財産をすべて放棄しないなら、私の弟子になることはできない。

34 だから、塩は良いものだ。だが塩に塩気がなくなれば、何によって味が付けられるのか。35 大地にも肥料にも役立たず、人々はそれを外に投げ捨ててしまう。聞く耳のある者は聞きなさい」。

2．文脈と構成

ルカ14章1節から始まるファリサイ派の議員宅での会食の場面は24節で締めくくられ、その直後の25節では明確な移行句を伴わずに新しい場面が導入される。ここではイエスが弟子たちを伴ってエルサレムに向かって旅する状況が示唆され、後続の26-35節では、旅の途上にあるイエスが同行する群衆に語った言葉が記されている。直前の大宴会の譬え（ルカ14:15-24）では、あらゆる人々に対する神の招きとそれに対する応答について語られていたのに対し、ここでは弟子になるための厳しい条件について述べられており、その意味でこの段落は、同様に大宴会の譬えの直後に倫理的勧告を述べるマタイ22:11-14に対応している[1]。その一方で、直前の譬えにおける最初の招待客たちの断りの理由（18-20節）はこの

段落における信従の言葉（26, 33節）に対応している等、双方の段落の間には関連性も認められる。なお、直後の15章では再び、ファリサイ派の人々も同席（？）する会食の場面に移り（ルカ15:2）、悔い改める罪人を受け入れる神の恵みを主題とする三つの譬えが語られている。この段落全体は以下のように区分される。

（１）序：状況設定（25節）
（２）信従に関する二つの言葉（26-27節）
　(a) 家族を憎むようにとの要求（26節）
　(b) 自分の十字架を担うようにとの要求（27節）
（３）自己検証に関する二つの譬え（28-32節）
　(a) 塔を建設する人の譬え（28-30節）
　(b) 戦争に臨む王の譬え（31-32節）
（４）所有放棄の要求（33節）
（５）塩の比喩（34-35節a）
（６）結語（35節b）

注目すべきことに、26, 27, 33節の信従の言葉はいずれも、否定の条件文（「～しないなら／～しない者は」）に続く οὐ δύναται εἶναί μου μαθητής（私の弟子になることはできない）という表現によって結ばれている。その意味でもこの段落全体は、並行する二重の譬え（28-30, 31-32節）を囲い込むこの表現（26, 27節及び33節）によって枠付けられ、さらにこの中核部分が冒頭の移行句（25節）と塩の比喩（34-35節a）及び結語（35節b）によって囲い込まれる構造になっている。

３．資料と編集

この段落は様々な伝承句及び編集句から構成されている。旅の状況を指し示

1　G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas,* II (ÖTK 3/2), Würzburg 1984, p. 320; J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-IX* (AB 28), New York 1985, p. 1060参照。

し、συμπορεύομαι τινι（「共に行く」という意のσυμπορεύομαιは新約ではルカ7:11; 14:25; 24:15にのみ使用）、ὄχλοι（複数形のὄχλοι［群衆］はルカの段落導入部に計8回、使に計7回使用[2]）、στραφεὶς εἶπεν πρὸς αὐτούς（≪言述の動詞＋πρός＋対象を示す対格≫は新約用例169回中ルカ文書に149回使用、さらにルカ7:44; 10:23; 23:28参照）等の多くのルカ的語彙を含む冒頭の導入句（25節）はルカの編集句であろう。

二つの信従の言葉（26-27節）は総じてマタイ10:37-38に並行していることからも（トマス55, 101も参照）、ルカ特殊資料[3]や口伝資料[4]ではなく、Q資料（あるいはルカ版Q資料[5]）に由来すると考えられる。両者は元来は相互に独立した伝承であったと考えられ[6]、双方ともその核においてイエスに遡ると想定される[7]。なお、27節に関しては、命の放棄と十字架を負うことを主題とするマルコ8:34-35（並行マタ16:24-25; ルカ9:23-24; ヨハ12:24-25）に影響されているのかもしれない[8]。なお、ルカのοὐ δύναται εἶναί μου μαθητής（私の弟子になることはできない）という表現に対して、マタイ版においてはοὐκ ἔστιν μου ἄξιος（私にふさわしくない）となっており、弟子になるための条件ではなく弟子性の保持が問題になっているが、ルカ版の方が原初的と考えられ[9]、おそらくマタイは、弟子への教えという文脈に合わせて改変したのであろう[10]。一方で、マタイ版ではこれらの言葉の

2 J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, p. 104参照。
3 W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 301.
4 J. Ernst, *Das Evangelium nach Lukas* (RNT), Regensburg 1977, p. 447.
5 M. Sato, *Q und Prophetie. Studien zur Gattungs- und Traditionsgeschichte der Quelle Q* (WUNT II/29), Tübingen 1988, pp. 52-53.
6 J. Nolland, *Luke 9:21-18:34* (WBC 35B), Dallas 1993, p. 761; F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas,* II (EKK Ⅲ/2), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1996, p. 527.
7 Fitzmyer, op. cit., p. 1061; W. Eckey, *Das Lukasevangelium. Unter Berücksichtigung seiner Parallelen,* II (Teilband II: 11,1-24,53), Neukirchen-Vluyn 2004, p. 668.
8 ヨハ12:25のὁ μισῶν τὴν ψυχὴν αὐτοῦ は26節のμισεῖ ... τὴν ψυχὴν ἑαυτοῦ に近似している。
9 R. ブルトマン『共観福音書伝承史Ⅰ』（ブルトマン著作集1）加山宏路訳、新教出版社、1983年、277頁。
10 S. Schulz, *Q. Die spruchquelle der Evangelisten,* 1972, p. 447; U. ルツ『マタイによる福音書』（EKK新約聖書註解Ⅰ/3）小河陽訳、教文館、1997年、179頁。

直後に命の放棄の言葉（マタ10:39）が続いているが、マタイがこの言葉を他の二つの言葉と結合したのではなく[11]、むしろルカが、命の放棄の言葉はすでにルカ9:24で言及していたため、重複を避けるためそれをルカ17:33に移動させたと考えられ[12]、その言葉の残部と見なしうるἔτι τε καὶ τὴν ψυχὴν ἑαυτοῦ（さらに自分の命まで）という表現はルカの編集的付加であろう（ἔτι τε καί は使21:28にも使用、ἑαυτοῦ は共観福音書用例113回中57回がルカに使用）。その他、εἴ τις ἔρχεται πρός με（τις［主格形］は共観福音書用例62回中39回がルカに使用、ἔρχεται πρός は6:47; 7:1にも使用）、τὴν γυναῖκα（14:20; 18:29［diff. マコ10:29］参照）、τοὺς ἀδελφοὺς καὶ τὰς ἀδελφάς（マコ10:29参照）、βαστάζει（共観福音書用例9回中5回がルカに使用）、ἑαυτοῦ（上記参照）、ἔρχεται ὀπίσω μου（cf. 9:23: ὀπίσω μου ἔρχεσθαι）等はルカの編集句であろう。なお、これらの言葉は、その核においてイエスに遡ると見なしうるであろう[13]。

二つの譬え（28-32節）は、他の福音書に並行記事が見られず、ルカ的語彙も限られていることから[14]、総じてルカ特殊資料に由来すると考えられるが（トマス98参照）、καθίσας（28, 31節）はルカの編集句かもしれない（καθίζω は新約ではマコ13:48以外ではルカ14: 28, 31; 16:6; 使16:13にのみ使用）。一部の研究者は30節もルカに帰しているが[15]、その点は明らかではない。また、これら二つの譬えは元来は独立していたと考えられるが[16]、おそらくルカ以前に結合していたのであろう。

これに続く33節は、οὕτως（適用句への導入としてルカ12:21; 15:7; 17:10; 22:26

11 Bovon, op. cit., pp. 527-528に反対。
12 J. Dupont, Renoncer à tous ses biens (Lc 14,33), *Nouvelle Revue Théologique* 93 (1971) 563f; Schulz, op. cit., p. 447; ルツ、前掲書、179頁。
13 ルツ、前掲書、180,190頁参照。
14 Jeremias, op. cit., pp. 242-243参照。
15 J. D. M. Derrett, Nisi dominus aedificaverit domum: Towers and Wars (Lk XIV 28–32), *NT* 19 (1977) 260; B. Heininger, *Metaphorik, Erzählstruktur und szenisch-dramatische Gestaltung in den Sondergutgleichnissen bei Lukas* (NTANF 24), Münster 1991, pp. 130,139; Nolland, op. cit., p. 761.
16 G. Eichholz, *Gleichnisse der Evangelien. Form, Überlieferung,* Auslegung, Neukirchen-Vluyn 1979, p. 193; Nolland, op. cit., pp. 762,764に反対。

にも使用）、ἀποτάσσω（新約用例6回中ルカ文書に4回使用）、πᾶς（ルカは頻繁にマルコ資料に付加［ルカ5,11.28; 18,22; 21,4参照］）、ἑαυτοῦ（上記参照）、ὑπάρχω（新約用例60回中ルカ文書に40回使用、≪τὰ ὑπάρχοντα τινί(τινός)≫は新約用例14回中ルカ文書に9回使用［ルカ8:3; 11:21; 12:15, 33, 44; 14:33; 16:1; 19:8; 使4:32］、さらにルカはこの動詞を「所有する」の意でルカ16:14; 使3:6; 4:34, 37; 28:7にも使用）等の多くのルカ的語彙を含んでいることに加え、ルカ福音書に特徴的な全所有の放棄に言及されていることからも（ルカ5:11, 28; 18:22参照）、ルカが編集的に構成したものと考えられる[17]。さらに、26, 27節と同様、ここでもοὐ δύναται εἶναί μου μαθητήςという表現が使用されていることも、ルカがこの節を編集的に構成したことを裏付けている。

塩の比喩（34-35a節）はマルコ9:50及びマタイ5:13に並行しているが、原初的には単一の伝承に遡ると考えられ、イエスに由来するのかもしれない[18]。このうち34節はマタイ5:13bに緊密に対応しており、35a節とマタイ5:13cは言語的にはやや相違するが、内容的には総じて一致しており、さらに両者はマルコ9:50には欠如しているμωρανθῇ（愚かになれば）及びἔξω βάλλω（外に投げ捨てる）を共有していることから、この段落は総じてQ資料に由来すると考えられる。その一方で、34節とマルコ9:50aもκαλὸν … τὸ ἅλας（塩は良いものだ）及び動詞ἀρτύω（塩味をつける）を共有しており、マルコ伝承からも影響を受けていると考えられる[19]。もっともδὲ καί（分詞を結合するδὲ καίは共観福音書用例31回中ルカに

17　Dupont, op. cit., pp. 569-570; F. W. Horn, *Glaube und Handeln in der Theologie des Lukas* (GTA26), Göttingen 1983, p. 195;ブルトマン、前掲書、277頁; T. E. Schmidt, *Hostility to Wealth in the Synoptic Gospels* (JSNT.S 15), Sheffield 1987, p. 153; Bovon, op cit., pp. 529-530も同意見。因みにJeremias, op. cit., p. 243は、ルカは好んでτὰ ὑπάρχοντα を与格形に結びつけている（8:3; 12:15; 使4:32）という理由から、属格形と結びつくἑαυτοῦ ὑπάρχουσινを伝承句と見なしているが、実際にはしばしば属格形とも結合させていることからも（ルカ11:21; 12:33, 44; 14:33; 16:1; 19:8）、この節が編集句であることを否定する根拠にはならないであろう。

18　I. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1995, p. 595; Eckey, op. cit., p. 668; ブルトマン、前掲書、168頁は別意見。

19　三好迪「ルカによる福音書」高橋虔他監修『新共同訳　新約聖書註解Ⅰ』、1991年、343頁は別意見。

26回使用）はルカの編集句であろう。段落末尾の35b節はルカ8:8（並行マコ4:9）と逐語的に一致しており、おそらくルカはこの結語をここから取り入れ、編集的に付加したのであろう。

以上のことからも、ルカはQ資料から得た二つの信従の言葉（26-27節）と自ら構成した編集句（33節）の間に特殊資料に由来する二つの譬え（28-32節）を挿入し、さらにQ資料及びマルコ資料をもとに構成した塩の言葉（34-35a節）を付加し、自ら構成した移行句（25節）とルカ8:8から取り入れられた結語（35b節）で枠付けることによって、この段落全体を弟子の条件という統一的主題のもとに構成したのであろう。

4．各節の検討

4.1. 序：状況設定（25節）

段落の冒頭部分で、まず状況設定が示される。「大勢の群衆」（ὄχλοι πολλοί）がイエスと共に道を進んでいいたが、イエスは振り向いて彼らに語りかける。ルカはここで、イエスがエルサレムに向かう旅の途上にあることを読者に改めて思い起こさせており（ルカ9:51; 10:38; 13:22参照）、後続のイエスの言葉は、イエスに同行してエルサレムへの道を歩んでいた多くの人々に向けられている。多くの群衆がイエスの旅に同行していたという状況は歴史的には想定しにくいが、後続の厳格な信従の要求との関連において、その要求を果たし得るものはごく少数であることを強調するための設定とも考えられる。その一方で、これらの群衆を、先行する譬えにおけるあとから招かれた人々（ルカ14:23）と直接関連づけることはできないであろう[20]。

20 C. H. Talbert, *Reading Luke: A Literary and Theological Commentary on the Third Gospel,* Georgia 2002, p. 174; H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 514; K. Löning *Das Geschichtswerk des Lukas,* Bd. II: Der Weg Jesu, Stuttgart/Berlin/Köln 2006, p. 129に反対。

4.2. 信従に関する二つの言葉（26-27節）

イエスに従って行こうとしていた人々はここで非常に厳しい要求を突きつけられることになる。すなわち、イエスの弟子になるためには、イエスのもとに来るだけでは十分ではなく、ここに挙げられている諸条件を満たさなければならないというのである。なお、並行箇所のマタイ10:37-38においては明らかに弟子たちが対象となっており、弟子になることではなく、弟子であり続けることが問題になっている。

4.2.1. 家族を憎むようにとの要求（26節）

最初の信従の言葉は家族との関係を扱っており、信従する者は自分の家族を「憎む」ことを要求される（ルカ8:19-21; 9:59-60; 12:51-53; 18:28-30参照）。一方のマタイ版では、「～を憎まないなら」（οὐ μισεῖ ...）の代わりに「私以上に～を愛する者は」（ὁ φιλῶν ... ὑπὲρ ἐμέ）という表現が用いられており、厳格さが幾分和らげられている（マタ10:37）。もっとも、ルカ版で用いられているμισέω（憎む）も、ヘブル語のשָׂנֵא に対応して、「より少なく愛する」という比較の意味合いを含んでいるものと考えられる（創29:30-33; 申21:15以下; 士15:2; シラ7:26 LXX; さらにルカ16:13∥マタ6:24参照）。また、ルカのテキストにおいても、心理的な意味での憎しみが問題になっているのではなく、むしろ意識的な拒絶や離反が意味されており[21]、W. シュテーゲマンはこの「憎む」という概念を「共同態の解消を宣言するものとして理解」[22]している。すなわち、この語は感情表現として理解すべきではなく、後回しにするという意味で解すべきであり、ここではエルサレムへの旅の文脈において（ルカ9:61; 18:29参照）、イエスへの信従を家族の絆に優先させることが求められている[23]。その意味で、この要求は必ずしも「あなたの父母を敬え」という十戒の第五戒（出20:12; 申5:16）と矛盾するものではなく、むしろ、両親、兄弟、子どもを顧みずに献身するレビ人に関する記述（申33:9-

21 O. Michel, ThWNT VI 694-695.
22 L. ショットロフ／W. シュテーゲマン『ナザレのイエス―貧しい者の希望』大貫隆訳、日本基督教団出版局、1989年、179頁。
23 Ernst, op. cit., p. 448は別意見。

10; 出32:27-29も参照）に対応している[24]。

一方のマタイ版が、「父と母」、「息子と娘」というように一対の家族構成員を二組挙げているのに対し、ルカは様々な近親者を個々に挙げ、「妻」（18:29参照）及び「兄弟たち、姉妹たち」（マコ10:29並行参照）を付加することにより、家族との決別をより一層強調している（ルカ12:53; 申33:9参照）。なお、ルカが末尾に付加したτὴν ψυχὴν ἑαυτοῦ（自分の命を）は命の放棄の言葉（ルカ9:24; 17:23）を思い起こさせるが、このことはルカがイエスへの信従を迫害状況との関連において理解していたことを示しており、次節の十字架の言葉を導入している。

4.2.2. 十字架を担うようにとの要求（27節）

二つ目の自分の十字架を担ってイエスのあとからついて行くようにとの要求は、ルカ9:23（並行マコ8:34）と関連し、神への全面的な献身について語っている。すなわち信従志望者は、自らの死さえも覚悟をすべきなのである。なお、「日々」自分の十字架を背負うように要求するルカ9:23では日常的・継続的な行為が強調されているのに対し、ここでは包括的な意味での信従への最終的決断が求められている。また、τὸν σταυρόν（十字架）の直後のἑαυτοῦは何より自分自身の十字架を担うことを示しているが、おそらく「十字架を担う」という表象は当初はイエスの十字架とは結びついておらず、イエスの死後、それに対する示唆として理解されるようになったのであろう[25]。ルカの文脈においてはイエスはこの言葉をエルサレム途上において語っていることからも、この言葉は明らかにイエスの十字架と関連づけられている。すなわち、イエスへの信従とは、彼の受難への道を跡づけ、追体験することなのである。その意味でも、ルカの考えでは、イエスのもとに来るだけでは十分ではなく、受難に至るまで彼の後からつき従っ

24　同様の考えは同時代のラビ文献やヘレニズム文献にも認められ（レビ・ラッバー 19:1; エプクテートス『語録』3:3:5-7; クセノフォン『ソクラテスの想い出』1:2:49-55参照）、これらの言葉とソクラテス伝承との関連も指摘されている（H. Hommel, Herrenworte im Lichte sokratischer Überlieferung, *ZNW* 57 (1966) 1–23）。

25　ブルトマン、前掲書、278頁参照。この表現の元来の意味についてはルツ、前掲書、188-190頁参照。

て行かねばならないのである[26]。

4.3. 自己検証に関する二つの譬え（28-32節）

二つの信従の言葉のあとには並行的に構成された二重の譬え（ルカ13:18-21; 15:4-10参照）が続いており、先行する二つの言葉が信従に関わる厳格な要求を示しているのに対し、ここでは何より自己吟味が問題になっている。すなわち、ここでイエスは、信従志願者に是が非でも信従するように要求しているのではなく、信従する際にはむしろ、厳しい要求を満たしうるかどうか、まず自分自身をしっかりと検証した上で決断するように勧告している[27]。双方の譬えはまた、最初から「もちろん、誰でもそのようにする」という肯定的な答えを想定する修辞疑問（τίς ...）によって導入され[28]、≪τίς＋現在分詞＋不定過去不定詞≫による計画の描写［28a節／31a節］→≪οὐχὶ πρῶτον καθίσας＋定動詞＋εἰ≫による経費の算出の描写［28b節／31b節］→実施可能性に関する帰結に関する記述［29-30節／32節］という構造を共有している[29]。

4.3.1. 塔を建設する人の譬え（28-30節）

前半の譬えで言及されている「塔」（πύργος）は、ぶどう園の見張り台（マコ12:1参照）もしくは望楼（あるいは農舎？）のことと考えられ[30]、通常は石を積

26 なお、一部の研究者は、この十字架の言葉のみならず、この段落全体をルカの教会の迫害状況の文脈から理解しようとしているが（例えばDupont, op. cit., pp. 580f; W. Schmithals, *Das Evangelium nach Lukas* (ZBK 3.1), Zürich 1980, p.161）、ルカの教会が迫害下にあったという点は確認することはできず、少なくともここでルカが迫害状況を強調しているとは考えられない。

27 Eichholz, op. cit., pp. 192-193参照。

28 A. Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu, II,* 2. Teil: Auslegung der Gleichnisreden der drei ersten Evangelien, Tübingen 1910, p. 202; Eichholz, op. cit., p. 194.

29 Klein, op. cit., p. 89; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 518参照。なお、J. エレミアス『イエスの譬え』善野碩之助訳、新教出版社、1969年、214頁は、前半の塔建設の譬え（28-30節）を「小さな例」、戦争に臨む王の譬え（31-32節）を「大きな例」と対比的に捉えているが、そのような対比が特に強調されているとは考えにくい。

30 Bovon, op. cit., p. 538参照。

み重ねて造られていた[31]。そのような塔を建設しようとする人は、自らの資産がそれを完成させるために十分であるかどうかを確認するため、「まず座って」（πρῶτον καθίσας）費用を見積もっておくことが必要となる。K. Löningは、後続の戦争に臨む王の譬えとの関連において、ここでの塔を町の防御用施設（城壁の塔）と見なしているが[32]（ヨセフス『ユダヤ戦記』5:156-171参照）、その点は十分に根拠づけられないであろう[33]。

しかし、もしその建築者がそのような事前の確認を怠るなら、彼は塔の完成させることができずに建築計画を途中で断念せざるを得ない事態に陥りかねない。そしてそうなると、その状況を目にした人々から、「この人は建て始めたが、完成させることはできなかった」と嘲けられるという不本意な結果に終わることにもなりえる[34]。注目すべきことに、ここでは（経済的）損失よりも社会的威信の失墜に焦点が当てられている[35]。

4.3.2. 戦争に臨む王の譬え（31-32節）

第二の譬え（31-32節）においては戦争遂行前の王について語られる。彼もまた、自らの戦力が戦いに勝利するに十分であるかどうか、実際に戦闘を交える前に精査しておかねばならない。そして、敵の勢力が自己のそれを上回っていることを確認したなら、彼は進軍してくる敵の軍隊がまだ遠くにいるうちに速やかに使者を送って（19:14参照）和を請わねばならないのである。先行する譬えにおいては、熟考せずに失敗した際の状況が強調されていたが、ここでは事前に精査した結果、最悪の事態を回避する状況が描写されている。その一方で、そもそも戦闘に赴こうとする前に精査すべきではなかったかという疑問も生じるが、ここでは不意に敵軍が進軍して来たときの状況が想定されているのかもしれない[36]。

31　三好、前掲書、343頁。
32　Löning, op. cit., p. 131.
33　Derrett, op. cit., pp. 251-254も参照。
34　ヨセフス『ユダヤ戦記』5:152参照。
35　Wolter, op. cit., p. 519.
36　Eichholz, op. cit., p. 195; Klein, op. cit., p. 516.

ἐρωτᾷ τὰ πρὸς εἰρήνην という表現は非常に難解で、七十人訳聖書においても、「挨拶する」(サム上10:4)、「安否を尋ねる」(士18:15 (B); サム上25:5; 30:21; サム下8:10; 11:7; 歴上18:10) 他、多様な意味で用いられている。一部の研究者はこの箇所を「無条件降伏する」という意味で解しているが[37]、そのような理解は二つの譬えを通して熟考することの意義を強調しようとするルカの文脈にそぐわないことからも、ここではむしろ和平条件の交渉の意で解すべきであり[38]、『十二族長の遺訓』「ユダ」9:7でも、類似表現（αἰτοῦσιν ἡμᾶς τὰ πρὸς εἰρήνην）が和平条件の交渉の意で用いられている。

ここで語られている二つの譬え（塔建設の譬え、戦争に臨む王の譬え）はいずれも日常的な経験から題材が取られているが、箴言24:3-6には、自分の家を賢明に建て、堅実に戦争を遂行する知恵について語られている。また双方の譬えは、πρῶτον καθίσας ψηφίζει／καθίσας πρῶτον βουλεύσεται（まず座って計算する／考える）という表現からも明らかなように、困難な企てを実行する前の自己に対する批判的検証が問題なっているが、そのように事を始める前に人はまず熟考し、自らの能力を精査しなければならず、さもなければ失敗に帰す可能性が高くなるのである。これと同様の考えは同時代のヘレニズム文献においても確認できる[39]。

おそらく、これらの譬えを伝承から受け取ったルカは、それらを「信従の真剣さ」という主題との関連において理解したのであろう。すなわち、イエスに信従しようとする者は、実際に行動に移す前に、自らが全面的な信従に対する準備ができているかどうか、まず検証しなければならない。また特に、ルカにおける受難へと至るイエスのエルサレムへの旅の文脈においては断固とした信従への決意が問題になっており、それに対する覚悟が要求されている。その意味では、安易な信従は避けるべきであり、「中途半端な着手は、全然着手しないことよりも悪い」[40]のである。

37 エレミアス、前掲書、214頁; Fitzmyer, op. cit., p. 1065; Marshall, op. cit., p. 594.
38 Jülicher, op. cit., p. 205; Eichholz, op. cit., p. 195; BDR §155$_2$参照。
39 エピクテートス『語録』3:15:1, 8-9; トマス〔語録〕98参照。
40 エレミアス、前掲書、214頁。

4.4. 所有放棄の要求（33節）

先行する二つの信従の言葉（26-27節）に続いて、イエスはさらに「自分の財産をすべて放棄しないなら、私の弟子になることはできない」と三つ目の信従の言葉を述べる。この言葉は、οὕτως οὖν（だから、このように）という導入表現が示しているように（ルカ12:21; 15:7, 10; 17:10; 21:31参照）、先行する二つの譬え（28-32節）を前提としており、また πᾶς ἐξ ὑμῶν（あなたたちのうちの誰でも）という表現は28節の τίς ... ἐξ ὑμῶν（あなたたちのうちの誰が）に対応している。さらに直前の二つの譬えと同様、ここでも信従の真剣さが主題になっているが、その一方で、双方の譬えの主題である「事を始める前の自己検証」はここでは特に問題にされておらず、また、この節における所有放棄の主題は、先行する譬えには見られず[41]、その意味で、両者は必ずしもスムーズに接合していない。その一方でF. W. Hornは、33節は教会における信従の失敗の経験を扱おうとする譬えの直接の適用であると主張し[42]、T. E. Schmidtも両者間に企ての失敗という共通要素を見ようとしているが[43]、33節では信従の失敗ではなく、徹底した信従の要求が問題になっていることは明らかであろう。

なお、τὰ ὑπάρχοντα τινί（τινός）という表現は、「誰かに所属するもの」を意味し、新約では一貫して地上の富の意味で用いられている。ルカにおいても、τὰ ὑπάρχοντα は常に物質的な所有物の意味で用いられ（ルカ8:3; 11:21; 12:15, 33, 44; 16:1; 19:8; 使4:32参照[44]）、ここでルカは πάντα を付加することによりこの意味を一層強調している（ルカ5:11, 28; 18:22参照）。また、ἀποτάσσομαι（中態形）は文字通りには「別れを告げる」や「放棄する」を意味し、確かに転義的な意味で用いられることもあるが、新約では常に字義的な意味で用いられており（ルカ9:61; 使18:18, 21）、ここでも文字通りの所有放棄が意味されていると見なしうる[45]。

41　ブルトマン、前掲書、295頁; Schneider, op. cit., p. 321.
42　Horn, op. cit., pp. 200-201.
43　Schmidt, op. cit., pp. 150-151.
44　この ὑπάρχοντα を全所有物ではなく売却可能な財産に限定するK. Bornhäuser, *Der Christ und seine Habe nach dem Neuen Testament. Eine soziologische Studie* (BFChTh 38), Gütersloh 1936, p. 42に反対。
45　K. Mineshige, *Besitzverzicht und Almosen bei Lukas. Wesen und Forderung des*

以上のことからも、ここでは全所有物の放棄という厳格な要求が問題になっていることは明らかであるが（ルカ12:33; 18:22参照）、一部の研究者はこの文章を比喩的な意味で解そうとしており、比較的多くの研究者はこの箇所を、自分の全財産をいつでも手放せるように備えておくという意味で解している[46]。しかしながら、このような理解は、すでにエルサレムへの道に向かって歩んでいるイエスが今や信従志望者に対して信従への断固とした決断を要求するというこの文脈に即していないという意味でも考えにくい[47]。そのことに加えて、この第三の信従の言葉はこの段落における頂点に位置づけられていることからも、当然のことながら、第一、第二の信従の言葉以上に徹底した要求を含んでいると考えられる。その意味において、このτὰ ὑπάρχοντα が「家族」（26節）をも含んでいる可能性も否定できないであろう[48]。

4.5. 塩の比喩（34-35節a）

二重の譬えのあとには塩の比喩（34-35節a）が続いているが、冒頭のοὖν（だから）は先行箇所との関連を示している。もっとも、先行する25-33節においては、どのように弟子になるのかという点が問題にされていたのに対し、ここではむしろ、どのようにして弟子であり続けるかという点に焦点が移っている[49]。この塩の比喩の元来の意味は明らかではなく、かつてはイスラエルに対する威嚇の言葉であったと考えられるが[50]、この言葉はすでにQ資料の段階において弟子と関連づけられていたのであろう（マタ5:13参照）。ルカの文脈においては、先行する箇所と

---

lukanischen Vermögensethos, Tübingen 2003, pp. 68-71.

46 Marshall, op. cit., p. 594; Dupont, op. cit., p. 575; R. J. Karris, Poor and Rich. The Lukan Sitz im Leben, in: C. K. Talbert (Hg), *Perspectives on Luke-Acts,* Danville/Edinburgh 1978, p. 121.

47 Schmidt, op. cit., p. 152.

48 D. P. Seccombe, *Possessions and the Poor in Luke-Acts* (SNTU.B 6), Linz 1982, p. 114; J. Gillmann, *Possessions and the Life of Faith: A Reading of Luke-Acts,* Collegeville 1991, p. 80.

49 Bovon, op. cit., p. 544.

50 Schulz, op. cit., p. 472; ルツ『マタイによる福音書』（EKK 新約聖書註解I/1）小河陽訳、教文館、1990年、313頁。

同様、この言葉も群衆に対して語られているが、ルカにおいても明らかに弟子たちのことが考えられている。

ここでは、塩が良いものであることを前提としつつ[51]、塩に「塩気がなくなれば」（直訳:「愚かになれば」）、「何によって味が付けられようか」という修辞疑問が続き、何ものによっても塩気が回復されることはあり得ないという点が表明される。そして、まさに塩が、その味を失えば役に立たなくなるのと同様に、それらの条件を満たさず、信従の覚悟ができていない弟子たちも弟子としての資格を失うことになる。このように、特にルカ版ではその本質を失った塩の否定的側面が強調されており、このことに加えて、先行する二つの譬え（28-32節）と同様、ここでも失敗例に言及しつつ信従の徹底性が強調されている[52]。

なお、塩が塩気を失うことは化学的にあり得ないことであるが、ここでは化学的混合物が含まれる死海からとれる岩塩のことが想定されており、そのような混合物が多く含まれている塩の場合は塩味が失われることもあったと考えられる。そして、そのような塩気を失った塩は、土地を肥えさせるためにも肥料（堆肥）にも用いることができず、無用の長物として棄て去られる運命にあった。すなわち、「塩気を失った塩はつまらない間に合わせの用途にさえ役立たない」[53]ものになってしまうが、同様のことは、本来の資質を失った弟子についても当てはまる。

4.6. 結語（35節b）

段落末尾の35節bは聞くことを要求しているが、並行するルカ8:8が群衆に対するイエスの言葉の結語として用いられているのと同様、この言葉もこの段落全体の結語と見なされる。もっとも、この段落と先行する段落との関連を勘案

51　プリニウス『博物誌』31:88参照。
52　因みにSchneider, op. cit., p. 322は、ルカはこの塩の言葉を、正しく使用されることによってのみその本来の意味を発揮しうる所有物との関連から解していると主張しているが、直前の33節では所有物の正しい使用ではなく放棄が問題になっている。
53　R. A. カルペパー『ルカ福音書』（NIB新約聖書註解4）太田修司訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、2002年、379頁。

するなら、この言葉はルカ14章全体を締め括る結語とも見なしうるであろう[54]。「聞く耳のある者」に対するこの呼びかけは明らかにルカの読者に対して向けられ、断固とした信従の決断を要求している。

結び：テキストの統一的主題とルカの文脈における意味

この段落における三つの信従の言葉（26, 27, 33節）は弟子になるための徹底した要求を主題にしている。ルカにおいてはこれらの要求は、マタイの並行箇所とは異なり、弟子たちではなく信従志望者に向けられている（25節）。そのように信従志望者は、文字通りに「すべて」を棄て去らねばならず、そうしなければ彼らはイエスの弟子になることはできない。その意味でも、イエスに信従するとは、妥協することなく近親者、自らの命、所有物等のあらゆることに対してイエスへの信従を優先させることなのである。

ルカは二つの譬え（28-32節）を三つの信従の言葉（26, 27, 33節）で囲い込むことによってこの段落を構成しているが、そうすることによってルカは要求の強調点を移行させており、二つの譬えにおいてと同様、信従の言葉においても自己検証が問題にされている。すなわち、信従志望者は、イエスへの信従を最終的に決断する前に、実際に自分がイエスに信従することができるのかどうか、まず自ら熟考しなければならないのであり、そのようにイエスは、ただ単に信従を呼びかけるのでなく、安易な信従に対しては警告を発している。もっともここでは、安易な信従に対する警告以上に信従自体の徹底性が強調されており、後続の塩の比喩（34-35節）も信従の真剣さを強調している。その意味でも、生半可な気持ちではなく真剣な思いをもって信従の決意をなすようにとの要求がこの段落の主旨なのである。

ルカはこの段落を、イエスのエルサレムへの旅の文脈の中に位置づけているが、それゆえ信従の要求の徹底性は、ルカ9:57-62と同様、ここでも旅の状況との関

54 Löning, op. cit., p. 133.

連において理解されねばならない。すなわち、イエスに信従することは、エルサレムにおける受難への道においてイエスに同行し、自らの家族や富を棄て去ることによって、彼の苦しみに与ることを意味している。それゆえ、イエスに信従しようとする者は、文字通りにすべてを放棄し、殉教をも覚悟しなければならないのである。

ルカの文脈においてはこれらの言葉は弟子ではなく群衆に向かって語られているが、その意味でもルカは、これらの言葉を彼の時代のキリスト者に向けて記したと考えられる[55]。それゆえ、これらの信従の言葉はいわゆる入信前の求道者にのみ向けられているわけではなく、今日のあらゆるキリスト者に対して向けられており、それぞれが死をも覚悟しつつ、日々信従の決意を新たになしていくように求められているのである。

55 Dupont, op. cit., pp. 1091以下; Horn, op. cit., pp. 200-201も同意見。その一方で、Wolter, op. cit., p. 519はこれに懐疑的である。